

どんなテレビ番組が見たいですか？

京都府立医科大学大学院医学研究科・神経発生生物学

野村真（のむら ただし）

僕がドイツという国を最初に意識したのは18歳のときです。当時の僕は、東北の地方都市、盛岡の高校に通う高校生でした。親元を離れ、賄い付き下宿の2階の6畳一間でのひとり暮らしです。朝から晩までバンカラ応援団の練習に明け暮れ、風呂が無いので近所の銭湯に毎晩通い、週末は喫茶店と古本屋で過ごすという、その当時でさえ、お前いつの時代の学生だよ、という学生生活を送っていました。いつのまにか高校3年生になり、受験勉強をしないといけないのになかなか身が入らない、そんなある夜のことです。隣の部屋の大学生から譲り受けた、ブラウン管テレビのスイッチを入れると、深夜映画が始まっていました。

それはとても奇妙な映画でした。

2人の男が、高い塔の上に腰掛けて、何かボソボソしゃべっています。男達の背中からは天使の羽のようなものが生えていました。街の人々には彼らが見えないようで、まるでユーレイのような扱いです。でもユーレイ達は、人間になりたがっているようでした。映画の中に、なぜか刑事コロンボが出てきました。コロンボは街の人にサインを求められたりします。でも、コロンボは、群衆の中の見えないユーレイ達の存在に気づきます。寒空の中、荒涼とした公園の一角のコーヒースタンドの前で、コロンボはユーレイに話しかけます。

見えないけど、いるな。

こっちに来ないか？ こっちは、いろいろ楽しいことがあるんだ。

寒い日に、熱いコーヒーを飲んだりする。それから、こうやって、手をすり合わせたる。これがまた、いいんだ。

特に一大事が起こるわけでもなく、淡々とした内容の映画です。しかし18歳の僕は、この映画に深く魅了されてしまいました。この映画は一体何なのだろう？ ウィキペディアも、インターネットも無い時代に、深夜放送の断片的な記憶から映画のタイトルを探るのは至難でした。やがて僕はこの映画がドイツの映画監督、ヴィム・ヴェンダースの「ベルリン天使の詩 (Der Himmel über Berlin)」であることを知ります。映画に登場した2人の男は世界の守護天使であり、人間界のあらゆる諸相を静かに見守っています。しかしある日、片方の天使が永遠の生命を棄てて人間になることを決意しま

す。全編モノクロームの詩的な映像美によって、カンヌ映画祭でも監督賞を受賞した作品です。世界中で大ヒットになったそうですが、当時の僕の周囲にこの映画を知っている人は誰もいませんでした。しかし僕の心の中に、寒空の公園のコーヒースタンドの風景がヨーロッパのイメージとして刻みこまれました。

月日は流れ、盛岡を離れた僕は大学生になっていました。バンカラ気質の抜けない僕は、第2外国語として当然のようにドイツ語を選びました。ドイツ語のワタナベ先生は、口髭をたくわえジーンズで講義をする、「カッコいいおじさんモデル」みたいなダンディーな先生でした。そんなワタナベ先生が初回の講義で、いきなりこうおっしゃられたのです。

Ich heie Watanabe.

Wie heien sie?

いきなりドイツ語かよ！ていうか、ドイツ語の講義なんだから、当然か。でも、こっちは初めてなんだから、せめて教科書使うとか・・・一人一人先生に当てられて、みんな困惑しているうちに、さすがに気づいたのです。ああ、これは、名前を聞かれているんだな、と。今思うと、これは最高の語学学習だったと思います。なにせ新しい言語は、実地で使わないと絶対覚えません。どうしよう、この人何言ってるんだろう、何て言えばいいんだろう、そんなのっぴきならない状況にならないと、外国語なんて絶対に上達しないのです。だから僕は、最初の授業で覚えたドイツ語の文章だけは今だに覚えています。その後の授業でワタナベ先生が教えてくれたドイツ語はすべて忘れてしまいましたが・・・

また月日は流れ、僕は研究者になっていました。しばらく日本で研究をしていましたが、いろいろ思うところあり、ヨーロッパで生活することにしました。といっても、ドイツではなく、ドイツよりもさらに北のスウェーデン、ストックホルムです。ポストドク研究員として職を得た研究室には、いろいろな国籍の研究員が集まっていました。その中に、クリスチャンとオラフという、2人のドイツ人がいました。四六時中機関銃のように喋りまくっている他の国の人達と違って、静かな雰囲気の彼らとは波長が合いました。最初の頃、僕は英語がうまく喋れず、みんなの会話についていくことができませんでした。それをクリスチャンに打ち明けると、彼はこんな風に言いました。

タダシ、言葉は練習だ。プラクティスだよ。何度もプラクティスを繰り返すうちに、少しずつうまくなっていくんだ。オラフを見てみろ。彼は最初、ここに来た時、なんにも喋れなかったのに、今ではみんなとスムーズに会話できているだろ。みんな同じ

だよ。

喋れないのに、喋れ、というのは苦行のような行いです。でもまあ、クリスチャンが言うなら、そうなんだろう。それからというもの、僕はこの苦行を続けることにしました。

上野千鶴子さんの「国境 お構いなし」という本の中には、異国暮らしにまつわるエピソードがたくさん書かれています。上野さんは留学前にコーネル大学の日本人向け集中英語コースに参加します。参加者の中で、上野さんは最も英語が喋れなかったそうです。しかし2年後、再びプログラムの参加者と会ってみたら、彼女は参加者の大半を追い抜いていたそうです。きっと異国で、喋って喋って、喋りまくったのでしょう。異国暮らしは、不自由との闘いです。母国だったら、母国語だったら、何も不自由しない些細なことに、恐ろしい時間とエネルギーを費やします。でも、上野さんの場合、例えばユカタン半島のバス待ちの行列の中で、突然「ああ、私はこの不自由さを味わうために異国に来ているんだ」という感覚が啓示のように降りてきたそうです。でも僕には、そんな啓示は最後まで降りてきませんでした。毎日毎日、次々と起こる問題、例えば住むアパートが無かったり、水道が壊れて熱湯しか出なくなったり、トイレと風呂が工事中で使えなかったり、零下30度の寒波でひどい凍傷になったり、息子が嘔吐下痢で死にそうになったり、そんな目の前のことを解決することに精一杯でした。でも不思議なことに、日々生きることに必死で、人生を諦めるという考えはまったく思いつきませんでした。北欧の家の窓は大きく、カーテンを閉める習慣がないので、家の中の様子がよくわかります。夕闇の中家路につくと、借り暮らしのアパートの食卓で絵を描く幼い娘の姿が、窓越しに見えました。娘は窓の外の僕に気づいて、笑顔で手を振りました。そんな光景を、昨日のこのように覚えています。

異国での暮らしが2年経ち、やがて3年経ちました。ストックホルムの公園には、必ずと言って良いほどコーヒースタンドがありました。冬の曇天の下、スタンドでコーヒを買って飲んでみると、ふと、こんな景色を昔どこかで見た気がしました。そうか、これがヨーロッパなのか、僕は今、ヨーロッパにいるのか、そう納得しました。

ある日クリスチャンが、面白い小説を読んだ、と話しかけてきました。教師と学生の淡い恋を描いた小説で、日本の作家が書いたらいいんだけど、タダシ知っているか？と聞くのです。僕は普段小説をほとんど読まないし、ましてや外国語に翻訳された内容からオリジナルを探すというのも至難の業です。しかし僕は、それが川上弘美の「センセイの鞆」という小説であることを突き止めました。あらためて僕はこの本を読み、彼と内容を確認しました。「なんだか、面白いよね。同じ小説を、僕はドイツ語

で読んで、タダシは日本語で読んで、今お互いにその内容を英語で喋っている」。そういえば、と思い、僕は彼に聞いてみました。ベルリン天使の詩って映画、知ってる？彼は驚いて、「もちろんだ、でも、なんでそんな映画、お前知っているんだ？あの映画は日本でも有名なのか？」僕はそのとき、あの映画を知っている人と初めて出会ったのです。

月日は流れ、僕は日本に帰国することになりました。帰国の前に、クリスチャンが僕の家族を彼のアパートに招待してくれました。「でもタダシ、うちの奥さんが心配してるんだ。夕食用意しようと思うんだけど、日本人って、一体何を食ってるんだ？って」僕は爆笑して言いました。「心配しなくていいよ。僕ら竹しか食わないパンダじゃないから」。家族4人で彼のアパートを訪問すると、彼と、彼の奥さんと、小さな息子が出迎えてくれました。つつましやかなアパートでの、短くも楽しい夕食の時間が忘れられません。

娘が通っていた小学校のクラスにもいろいろな国籍の友達がありました。ある日、家で娘が世界地図を描いていました。地図には20カ国くらいの国名が描いてありましたが、位置も形もてんでばらばら、教科書に載っている地図とは比べようもありません。でもなんでこんなにいろいろな国を描いたの？と聞いたら、娘は答えました。「アメリカはフレイヤーの生まれたところだし、トルコはガクセルの生まれたところ、イランはヤサマンの故郷でしょ、インドはニベイディーの国だし・・・」ああそうか、彼女にとって、国とか国境とか、そんなの本当にどうでも良くて、世界というのは彼女の友達のいる国、友達の故郷、それ以上でもそれ以下でもないんだ、と悟りました。

東北大学で研究されていた仲村春和先生は、研究者が留学する理由について、一言「友達ができるから」と言っていました。研究の実利的な面ばかりを期待していると、いささか拍子抜けする理由かもしれません。でも僕は、その意味を深く理解しました。知らない世界の人と仲良くなるということは、その人を通じて、知らない文化を理解するということです。留学中、一時帰国してお会いした東京大学の後藤由季子先生も言っていました。「野村さん、留学すると、自分がニッポン代表になりますよね」。ああ、本当にそうなんです。そんな大それた役、引き受けたつもりもないのに、異国ではその時、その場所で、僕がニッポン代表になってしまう。こんなことなら、もっといろいろなことを勉強しておけばよかったのに、なんて後悔しても始まらない、その時持っている知識と技量で、喋るしかありません。異国で友達をつくるには、喋りまくらないといけないのです。

あれから何度かドイツに行く機会があったけれど、僕はまだベルリンに行ったことが

ありません。ヴェンダースが撮影した「壁」が崩壊する前のベルリンとは、もう随分様子が違うのでしょう。でも、もしベルリンに行く機会があったら、曇天の下、公園のスタンドで紙コップに入ったコーヒーを買って、体を温めてみようと思います。そうしたらコロomboみたいに、見えない何かが見えるかもしれません。考えてみれば、ヴェンダースの描いた守護天使というのは、過去を振り返って俯瞰する私たち自身の姿だったのかもしれないと、今思います。

そうそう、ワタナベ先生のおかげで、僕は本当に少しだけドイツ語を覚えていました。留学中、研究室の仲間と旅行に出かけた時のことです。クリスチャンの運転する車に、僕とオラフが同乗していました。僕は2人に「実はちょっとだけドイツ語がしゃべれるんだ」と言いました。なんだ、言ってみろ、というので、僕はこう言ったのです。

Was für sendungen sehen sie gern? (どんなテレビ番組が見たいですか?)

一瞬の沈黙の後、車内は爆笑に包まれました。クリスチャンが、笑いこぼげながら言いました。

「タダシ、すげえいいよ。そのセンテンス。なぜって、そこから会話が始まる」。

(おわり)



「ベルリン天使の詩」より。刑事コロンボ役のピーター・フォークも元天使という設定でした。



イタリアのサルディニア島で、クリスチャンと。